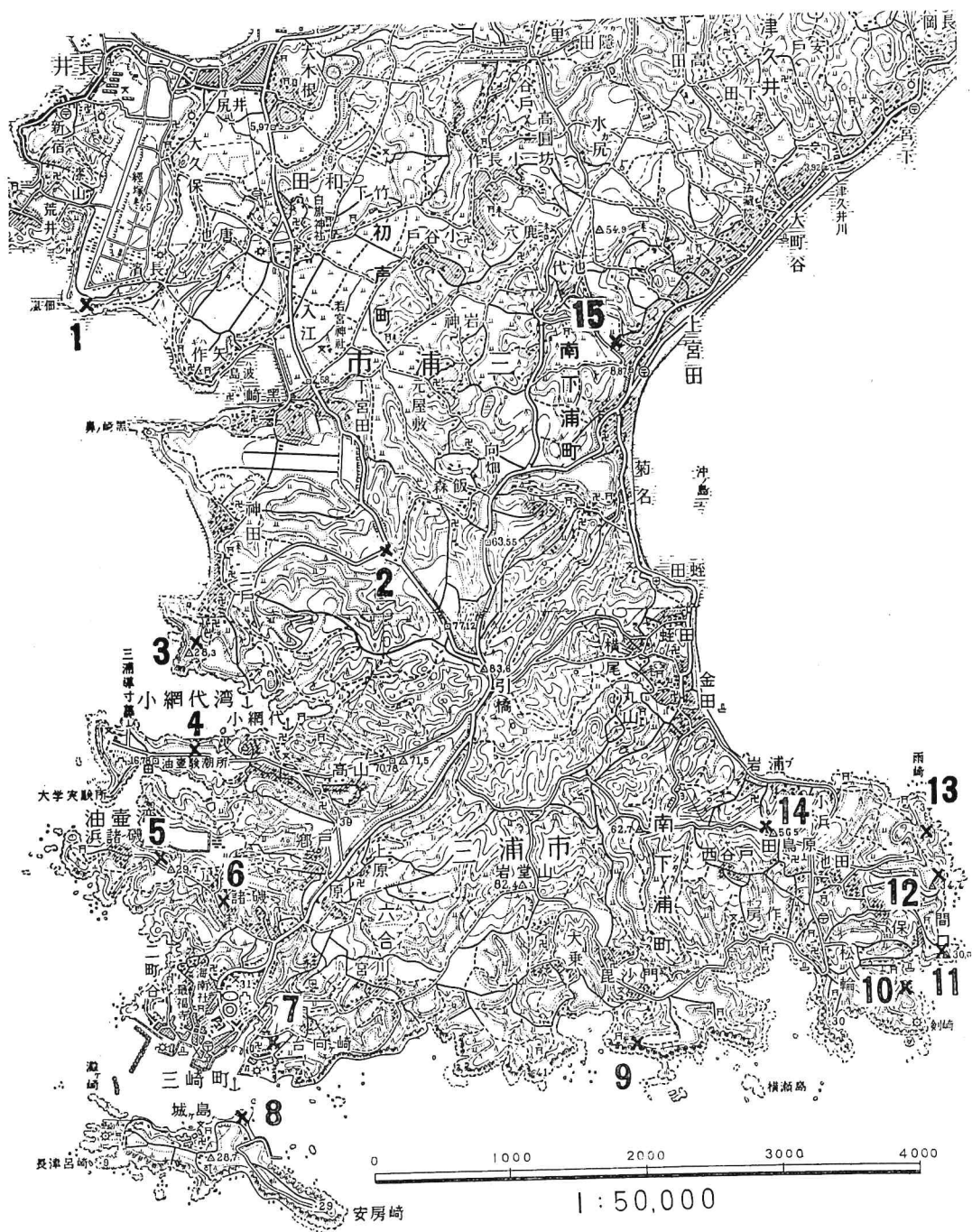
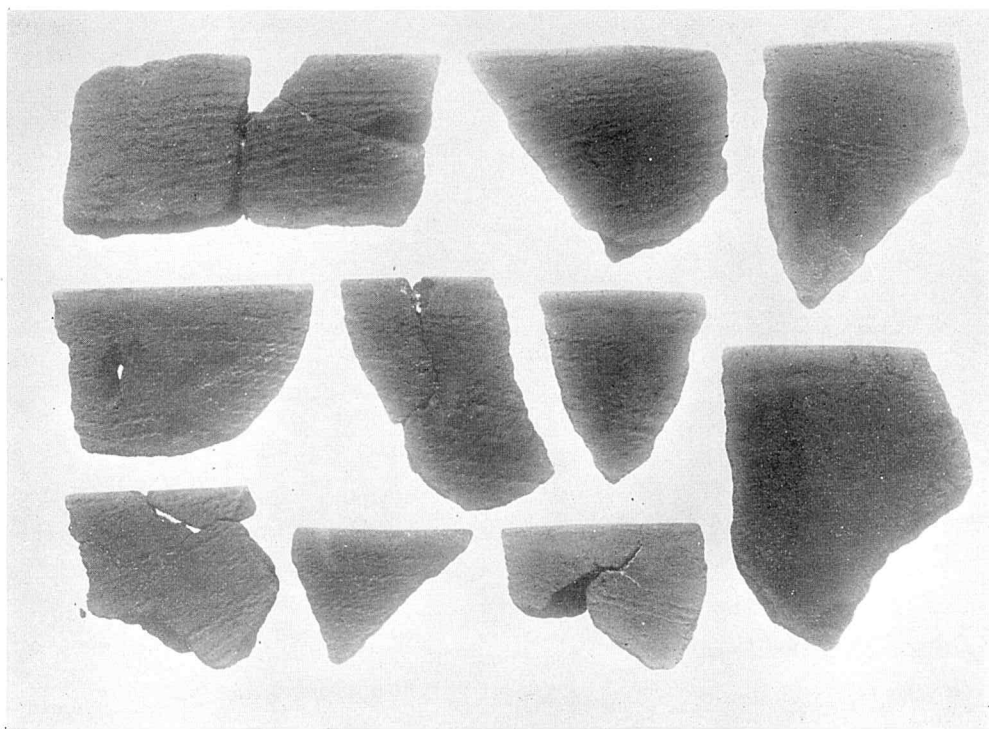
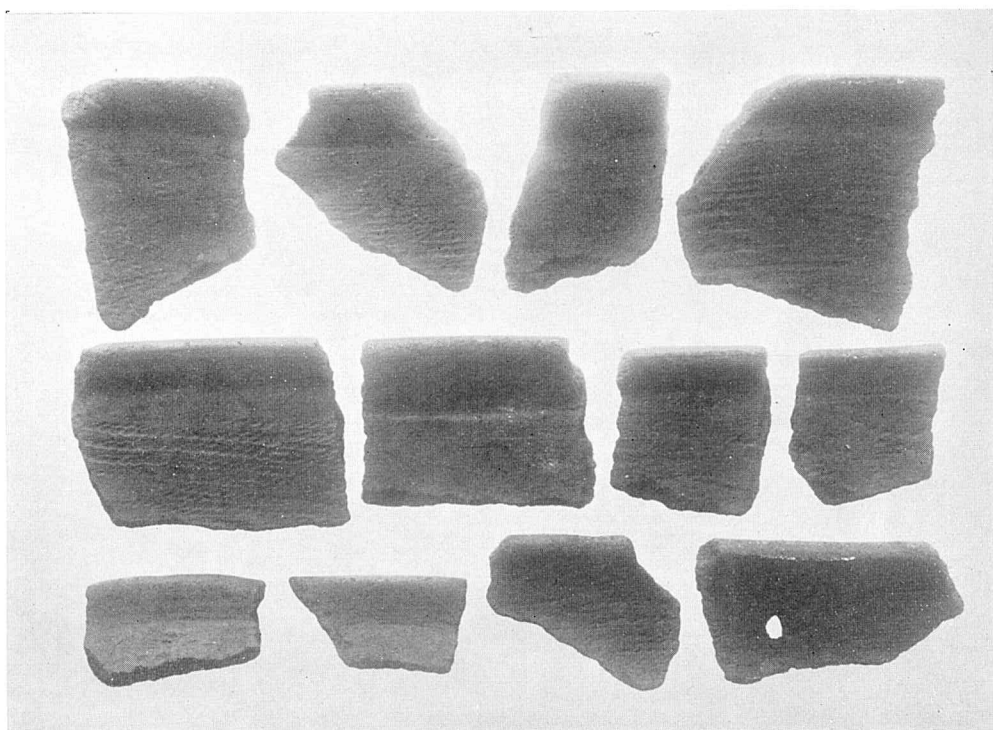




図版一、三浦半島南部の主要遺跡

- 1 長浜横穴群、2 赤坂遺跡、3 三戸遺跡、4 鶴ヶ島台遺跡、5 白須遺跡、6 諸蔵貝塚、7 大棒寺山古墳
 8 城ヶ島遺跡、9 毘沙門洞窟、10 間口洞窟、11 大浦山遺跡、12 金掘山遺跡、13 雨ヶ崎遺跡、14 田島
 原遺跡、15 上宮田遺跡



図版二 大浦山式土器（上段a類、下段b類）

三浦市大浦山遺跡

岡 本 勇

ま え が き

一九四八年の春、『三浦半島城郭史』を書くために台場址や砲台址の調査を進めていた赤星直忠先生は、大浦山台場址の一隅で特殊な燃系文のある土器を採集された。それは、いままで知られていた燃系文土器のいかなる型式のなかにも類例が求められぬものであったので、すくなく私たちの関心をひきおこした。その後一九四九年二月六日、一部分に試掘をおこない、比較的多数の資料を採集した。この結果、燃系文のある土器の文様や器形は、ある程度あきらかになり、また無文の土器を伴うことなどもわかった。かくて、私たちの間には「大浦山式」の名称が使用され、その年代についても、いくつかの理由から、燃系文土器群のなかで最も新しいのではないかと考えるようになった。また、川崎市生田、中谷遺跡で採集した燃系文土器のなかに類例が見出され、その分布の一端があきらかとなった。しかし、まだ「大浦山式土器」を提唱するためには、いくつかの未解決の問題があったし、土器以外の遺物もほとんど不明であったから、いつかは正式な調査をおこなわねばならぬと思っていた。けれども、私たちの懸案はなかなか実現されなかった。

遺跡が発見されてから、ちょうど一〇年目の一九五八年、横須賀市博物館の事業として調査が企画され、赤星先生を担当者とする発掘が、六月五日から四日間に行なわれておこなわれた。この調査には、赤星先生と私の他に多くのの方々に参加された。

浜田勘太、西条好晴、川上久夫、村越 潔、神沢勇一、塚田明治、井上裕之、古要祐慶、須賀由也（以上横須賀考古学会）、麻生 優、根田信隆、井上義弘、県立横須賀高等学校歴史研究部、市立横須賀工業高等学校郷土研究部、県立三崎高等学校有志生徒

この報告は、本来ならば赤星先生によって執筆されるべきであるが、先生のご配慮により私にすべてが一任された。多くの不備と欠陥は、私の学問のまずしさにかかっている。このことをひそかにおそれつつ、赤星直忠先生はじめ前記の方々のご協力にたいし、ふかい感謝をあらわしたい。

一、遺 跡

1 遺跡の位置（図版一）

大浦山遺跡は、神奈川県三浦市南下浦町松輪、旧小字間口の通称大浦山にある。

三浦半島の南部を形成する海蝕台地は、平坦な地貌を呈して、東は浦賀水道、西は相模湾、南は相模灘に面している、この海蝕台地の最東南端には、房総半島を眼前にみるように剣崎灯台があり、第三紀層の露岩からなる付近の海岸は美しい景観を示している。この北方、約五〇〇メートルの位置に間口入江をへだてて半島状の小台地がつき出ているが、その台地は基部で北接する台地といったん切れているので、正確には独立丘状をなしている。この丘を大浦山とよんでいる。丘上は平坦であり、標高三〇メートルをかぞえる。大浦山は南北に細長く、その東と南の二方は絶壁状をなして海につづいている。遺跡は、この丘上の最先端に位置するが、遺物を包含する範囲はきわめて狭いようである。おそらく、その面積は三〇〇平方メートルをこえないであろう。

嘉永年間、この場所には東京湾防備のための台場がつくられ、砲三門がおかれたといわれる⁽¹⁾。また、第二次大戦中には、雨ヶ崎砲台の右翼観測所が構築され、いまなおコンクリートのみにくい残骸をとどめている。台地上の多くは、ながい間松林であったが、戦後は耕地として開墾され、私たちの発掘した部分は、山田国蔵氏によって耕作されている。

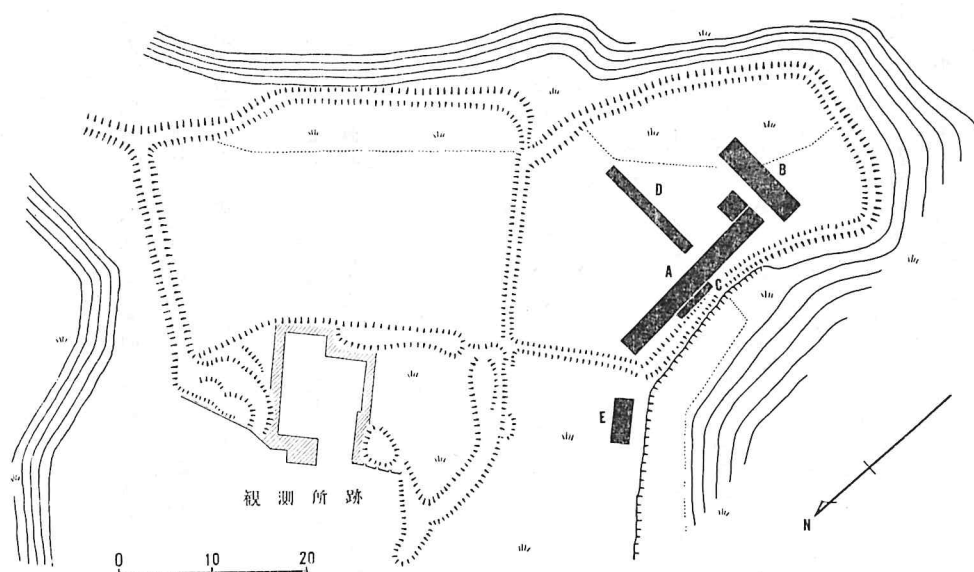
2 周辺の遺跡(図版一)

いわゆる三崎海蝕台地には、三戸・鵜ヶ島台・白須など数カ所の縄文時代早期の遺跡が存在している。しかし、それらはいずれも相模湾岸、つまり西岸地域に分布するものであり、東岸地域には早期の遺跡は知られていなかった。このことは、そのふたつの地域が環境的に異なっているという意味によるのではなく、たんなる偶然にすぎない。大浦山遺跡の発見以後、ようやく二、三の遺跡の存在があきらかとなった。すなわち、その北方約五〇〇メートルの位置にある金掘山からは、夏島式相当の土器が発見され、さらにその北方の雨ヶ崎からは、三戸式・茅山式、および型式不詳の撚糸文土器などが出土した。このふたつの遺跡は、ともに海にのぞんだ台地の縁辺に立地しているが、大浦山の西北方に位する田島原遺跡は、海岸から遠ざかった台地上の高い部分にあり、早期の前半に属すると考えられる無文土器(大浦山第二型式とは異なる)などが採集されている。これらの遺跡は、大浦山を中心として半径二キロ以内の距離に分布しているが、まだ正式な調査はおこなわれていない。

なお、大浦山遺跡のすぐ下方に海蝕洞窟があり、弥生時代後期の生活址と、それに後続する時代の墳墓とがのこされている。これを大浦山洞窟とよんでおり、一九五〇年赤星先生によって調査された⁽²⁾。

3 発掘(第一図)

発掘は、A・B・C・D・Eの五つのトレンチでおこなわれた。Aトレンチは、台地先端部の中央よりやや西寄りの部分に南北の方向に設定した。これは試掘の結果、および畑の崖面でみられた遺物の包含状態からみて、その付近が遺跡の中央部と思われたからである。長さ一七メートル巾二メートルの規模をもち、二メートルごとに一メートルの壁をのこして、六つの区に分けて発掘を進めた。遺物の比較的多かったのはI区およ



第一図 遺跡と発掘区域

び4区付近であったので、1区に接して東西方向にBトレンチ(2×10メートル)を設け、また4区の西側にAトレンチと平行にCトレンチ(1×4メートル)を設けた。さらに遺物の分布範囲、あるいは住居址等の遺構を追求する目的で、Aトレンチと東へ直角にDトレンチ(1×10メートル)を、またAトレンチの北方にEトレンチ(2×4メートル)を、それぞれ設定した。これらの発掘の総面積は七六平方メートルを数える。

いずれのトレンチにおいても、層位に大きな差はみられない。三〇センチ前後の耕作土の下に、きわめて硬質の黒色土があるが、その厚さは六〇〜七〇センチにほぼ一定している。この下に一〇数センチの厚さの褐色土があり、さらにローム層へとつづいている。これらは、いわば自然的に堆積したものである。ローム面は、地表面とほぼ同様にごくゆるやかに南へ傾斜しているが、凹凸はなく、ほとんど平坦であり、なんらの遺構もみられなかった。

4 遺物の出土状態

遺物は、一応各トレンチから出土したが、その割合は一樣ではなく、場所により濃淡がいちぢるしい。Aトレンチの南半およびBトレンチからは、比較的多くの土器片等が発見されたが、Aトレンチの北端では皆無にひとしく、またDトレンチやEトレンチではおおむね稀薄であった。

発見された土器はいずれも破片であり、約二五〇片ほどを数えるが、これは発掘面積の割合からいえば、決して多いとはいえない。土器の包含されているのは、黒色土層の最下部から褐色土層の上半にかけての、わずか二〇センチたらずの範囲であり、それをはずれてはほとんどなんらの破片もみられない。ただ例外は、数片の第三型式土器(凹線文のあるもの)がDトレンチの黒色土層の下半から、すなわち他よりも相対的に上層から発見されたのみである。第一型式土器

(捺糸文のあるもの)と第二型式土器(無文のもの)との間に、上下関係もしくは地点による出土差を見出すべく注意をはらったが、明瞭な差別はみとめられなかった。両者の出土関係は、混在の状態にあったといわねばならない。したがって、それにとまって発見された数個の石器や黒曜石片などの型式上の所属はいずれともきめがたい。

早期の遺跡からは、多量の礫塊(河原石)の発見されるのをつねとするが、この遺跡では僅かに数えるほどしか得られなかった。それにひきかえ、付近の海岸で容易に採集できる柔軟な凝灰岩の小さなかけらが、しばしば散漫に出土し、なかには焼けたと思われるものもあったが、とくに注意されるような出土状態は示さなかった。

(註)

- 1 赤星直忠「三浦半島城郭史」(上)一九五四年
- 2 赤星直忠「海蝕洞窟—三浦半島に於ける弥生式遺跡—」、なお大浦山洞窟の土器については、神沢勇一氏による詳細な報告が本号に掲載されている。

二、遺

物

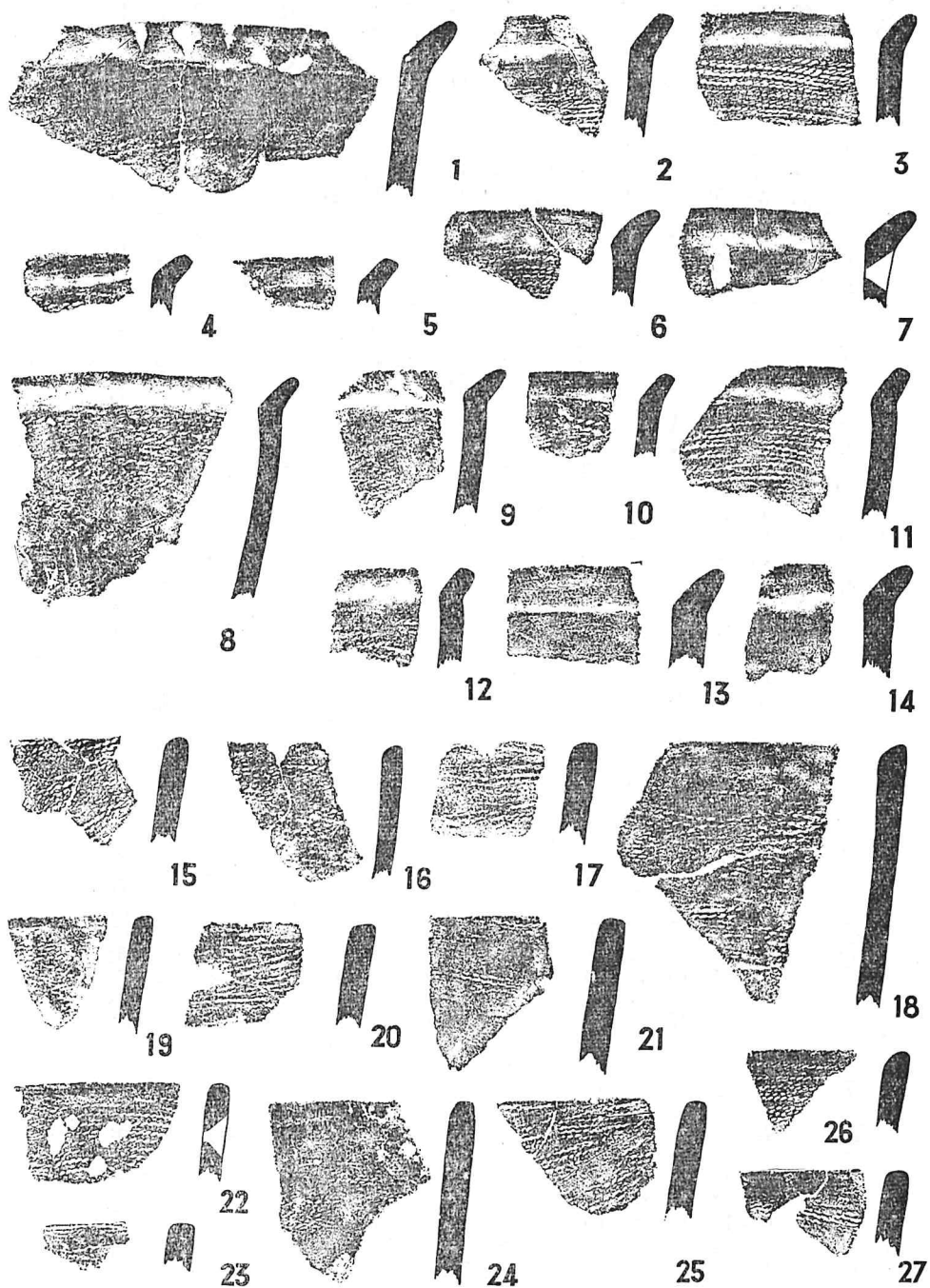
1 土 器(第二図・第三図)

発掘されたものの他に、試掘や表面採集によってえられた資料がかなりあり、それらをあわせると約五〇〇個の大小の破片が数えられる。これらを文様の上からみると、捺糸文のあるもの、無文のもの、凹線文のあるものの三つに区別できるが、さらにそれらは部分的な器形や土質などの上にも、はっきりしたちがいをみせている。この観察にもとづくまでもなく、以上は三つの型式に分類されるべきである。なお、それらを量的にみると、捺糸文のあるもの、すなわち第一型式土器が主体をなし、全体の約三分の二を占める。ついで第二型式土器(無文のもの)が残りのほぼ三分の一を占め、第三型式土器(凹線文のあるもの)は僅かに数片をかぞえるのみである。

A、第一型式(第二図・第三図)

捺糸文のある土器は、ほとんどすべて赤味がかった褐色をおびているので、他との識別は容易である。また、胎土に一樣に白い微細な粉末を含んでいるのも、大きな特徴といえる。口辺部付近で一センチ前後の厚さをはかるものが多く、概して厚手である。器面は表裏ともによく磨かれており、とくに表面では多くのものにつやが感じられる。

捺糸文の条間隔は、比較的粗いものが多い。節の大きさは、ほぼ一定しており、ほとんどすべては△RVの撚りであることを示している。圧痕はうすく、不鮮明なものが多い。このことは、器面が磨かれてのちに、しかも粘土がかなり乾燥してから、回転施文されたらしいことを示してい

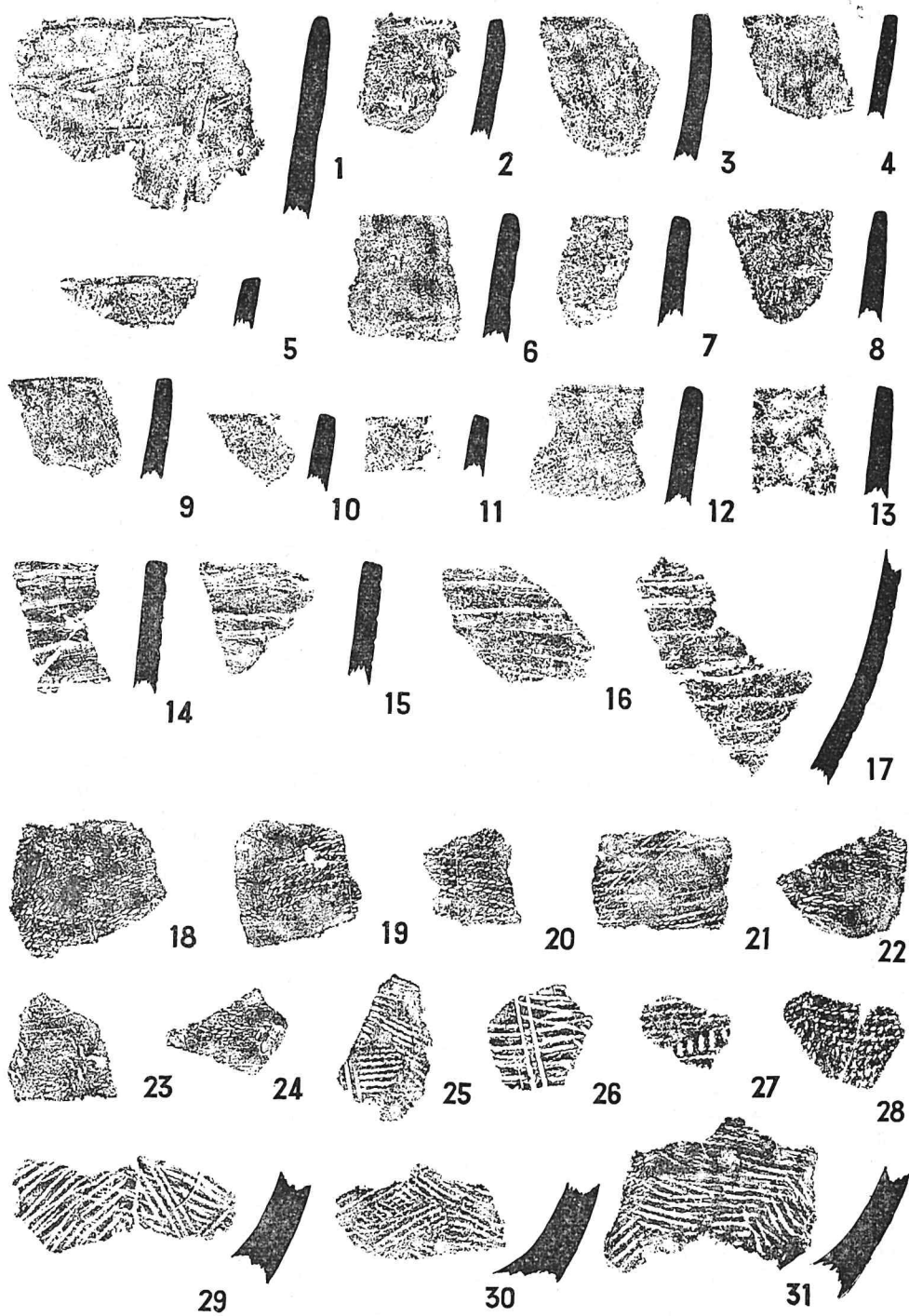


第二圖 土 器 第 一 型 式

る。したがって、この場合の施文のもつ意味は、胎土をかたくしめるということよりも、一種の裝飾としての役割の方が大きかったのかもしれない。ある部分には、まったく文様が施されていない(第二図13・14)。しかし、底部での文様のあり方は、かなりちがっている、圧痕がふかく、そのために節は条痕のようにみえる。(第三図29・30・31)。これは、⁽¹⁾の器壁が口辺部や胴部よりはるかに厚いため、乾燥のおくれたことに原因の一つが求められるだろう。また、口辺部や胴部での撚糸文が、ほとんどすべて横方向に走るのにたいし、底部では斜めに、しかも乱雑に交叉して施されている。このことから考えられるのは、口縁を上にし底部を下にした位置で施文がおこなわれたのではないかということである。また、いくつかの観察例によれば、施文原体は数条を単位とする比較的巾せまいものであり、これを右から左へ、あるいは左から右へ回転したらしい。底部のある部分には、原体をそのまま押捺した例がみられるが(第三図27)、これは実験の結果によれば、直径約6ミリの丸棒に相応の撚糸 Δ RVをまきつけてえられた圧痕に、もっともよく一致している。また、横走する撚糸文の間に、縦にいくつかならんだ節状の圧痕をもつ破片があるが(第三図23・24)、これがどのような場合に生じたものかは、あきらかになしえない。撚糸文を横切って二本の平行の沈線をつけたものがみられるが(第三図26)、これは文様として意識的に施されたものではないだろう。もし、これを竹管とすれば、直径セミリの太さのものであり、あるいは原体の丸棒の一端が偶然に器面をきずつけたのかもしれない。この他に、施文原体を回転せずにひきずつたと思われるものがあり、一種の条痕をあらわしている(第三図25)。

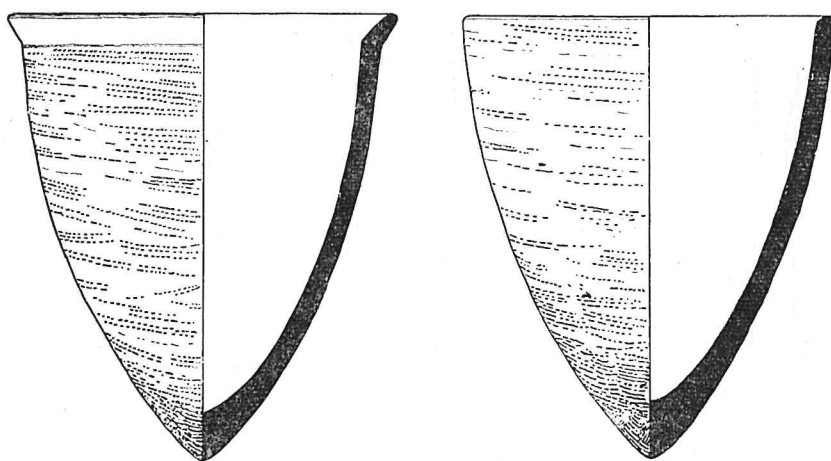
撚糸文のある土器の器形は、口辺から底部へかけてゆるいカーブを示すだけの単純な深鉢形であろうと推定される。底部は比較的鋭角にひらきその角度は九〇度以内とはかることができる。また、先端は尖っており、きわめて分厚いことが特徴である。胴部には、ことさらとりあげて説明するような変化はみられない。口辺部の形は特異であり、二つの種類がみとめられる。第一型式の土器をa類とb類に区別するのは、このちがいにもとづいている。a類は、その口縁がくの字状にくっきりとまがったもので、内面の屈曲した部分は鋭い稜をなしている(第二図1—14)。b類は、たんに直口しただけのもので、その先端は内面にそって円味をおびたものが多い(第二図15—27)。このようなふたつの異った形が、一型式にそなわるといふ事実の背後には、なにか大きな問題がひそんでいる。a類の屈曲した部分には文様はみられないが、b類の多くのものでは口縁のすぐ下から文様がはじまっている。しかし、それにつづく胴部以下の文様・器形は、いうまでもなく同一であり区別ができない。この両者の量的な割合は、ほぼ同数である。

いわゆる補修孔をもった口辺部の破片があるが、これらの孔は表面から縦に細長くあけられている(第二図7・22)。またそれとは別に、口縁に楔状の刻みのつけられたものがあり、これは割れ目を間に二つがならんでいる(第二図1)。おなじく、補修のためにとられた処置ではなかったかと考えられる。⁽¹⁾



七

第三圖 第一、第二、第三型式



第五図 大浦山式土器復原図 (左a類、右b類)

ここに提唱したい。大浦山式土器は、いわゆる捺糸文土器群のなかの諸型式(井草式・大丸式・夏島式・稻荷台式・花輪台式等)とは、はっきり区別されるいくつかの特徴をそなえている。

文様は、捺糸文をほとんど唯一のものとしているが、それが器面を横走するものであることは、この型式のもっとも典型とすべきメルクマールである。捺糸文土器群の他の型式にみられる捺糸文は、ほとんどすべて縦あるいはいくらか斜めに器面を走っている。しかし、捺糸がほとんど Δ RVである点は、捺糸文土器群の圧倒的多数が Δ RVの捺糸であることと傾向を同じくしている。器形もまた、かなり異っている、底部は分厚く、尖底は鋭角にひらいているが、これはその上につづく器形のちがいを意味している。ひとくちに単純な深鉢形といっても、夏島式(夏島貝塚出土例)や稻荷台式(大丸式遺跡出土例)の完形土器にくらべれば、けっしておなじではない。そればかりか、口辺部の形は他のいかなるものにもみられない独得のものである。a類とよんだものは、くの字状に屈曲した形を示し、b類は直行しただけのものであるが、これは横行する捺糸文とともに、大浦山式の型式を特徴づけている。このa類とb類は、ほぼ同数量出土しているが、なぜ一型式内にこのようなちがいがあるのか、そしてa類のような複雑な形がどうして生れたのか、にわかに説明しえない問題を含んでいる。捺糸文土器群の終末期から、無文土器群の時期にかけては、器形の大小の分化、平底の出現などという土器の形の上に大きな変化があらわれるが、このような現象との関連を十分に考える必要があるだろう。

また、大浦山式土器が、やや厚手で赤味がかった褐色を呈している点も、みがされてはならない。捺糸文土器群の多くの土器は、概して薄手であり、またその色調は黒褐色ないし茶褐色を主にしているからである。もし、大浦山式に属する文様もないような小さな破片が、他の土器のなかに混っていたとしても色調やその他の感じから判断して摘出することが可能である。原料の粘土ないしは焼成の技術になんらかの差があったためと考えね

ばならない。

2 分 布

大浦山式土器は、現在神奈川県下の数カ所の遺跡で発見されている。いま、その地名をつぎのようにあげることができる。

1. 川崎市生田、中谷遺跡
2. 横浜市保土ヶ谷区白根町、日影山遺跡
3. 横浜市磯子区森町、赤穂原遺跡（これは南区上大岡町十王堂免にまたがる）
5. 横須賀市夏島町、夏島貝塚
6. 横須賀市鴨居、小原台E地点遺跡
6. 横須賀市西浦賀町、平根山遺跡
7. 三浦市南下浦町松輪、大浦山遺跡

以上の遺跡について簡単に説明すると、まず中谷遺跡は、一九四八年に私たちによる調査が行われた。⁽¹⁾しかし、この遺跡の包含層は、すでに耕作のため攪乱されており、夏島式・平坂式(?)などの早期前半の土器に混って、若干の大浦山式土器が採集されたにすぎなかった。このなかにはb類に属する口辺部の破片が三個ほどふくまれている。日影山遺跡は、『横浜市史』(一九五八年)に關係した遺跡分布調査のさいにあらかにされたが、まだ正式な調査はおこなわれていない。赤穂原遺跡は、林国治氏によって発見され、大浦山式土器とそれに伴う礫器がおびただしく多数出土していた。一九五八年六月、芹沢長介氏と私たちによる発掘調査がおこなわれ、大浦山式土器とその文化の内容をいっそう鮮明にするこゝとができた。夏島貝塚は、縄文時代早期の貝塚として有名であり、明治大学考古学研究室による三度の調査がおこなわれたが、このさい若干の大浦山式土器(b類)が発見された。芹沢長介氏が、『夏島Ⅱ式C』と分類したものがそれである。⁽²⁾小原台E地点遺跡は、横須賀考古学会が小原台周辺の遺跡踏査を試みたさい、防衛大学校々庭の一隅に発見したもので、無文の土器とともに大浦山式土器(a類)が採集されたが、資料は少い。平根山遺跡は、一九五六年に横須賀市博物館の主催による発掘がおこなわれ、すでにその報告も発表された。⁽³⁾この遺跡の上層からは、多量の無文土器に混って数片の大浦山式土器(b類)が出土している。

以上のように、大浦山式土器は、多摩丘陵から三浦半島へかけての地域に分布している。この事実から、いきなり大浦山式土器の分布圏を帰納することは許されないが、おなじように調査の進んでいる武蔵野台地や下総台地の一部に、ほとんど未発見であるということは、十分に考慮さるべきことかもしれない。

大浦山式と断定することはできないが、それとわめてよく似た土器片が吉田格氏によって調査された、茨城県花輪台貝塚の資料のなかに見出される。⁽⁴⁾これは△RVの捺糸文が横走し、直行した口辺の先端が円味を示した形のもので、花輪台式土器にもなつて出土した。口縁下に太い凹みのあることや、条間隔の密な捺糸文のもつ感じなどが大浦山式とちがっているが、それにきわめて近いものであることは疑いない。この土器片の存在は、大浦山式と花輪台式との併行関係を考えさせる手がかりの一つでもある。

なお、たんに捺糸文の横走するというだけの土器は、断片的にはあるが、他の地方でいくつか発見されている。長野県の樋沢遺跡や、細久保遺跡などからは、捺型文土器に伴つて出土しているし、⁽⁵⁾また香川県小高島貝塚や、大分県早水台遺跡など、⁽⁶⁾瀬戸内海から九州東部にかけての地方の諸遺跡でも、おなじく捺型文土器に伴なう横走向の捺糸文土器が知られている。しかし、これらは部分的な器形や、捺糸文のあり方など多くの点で、大浦山式とは異っており、また共伴した捺型文土器の時期が早期の中葉前後のものであることからみて、直接の関係を考えることはできない。

3 編年上の位置

大浦山式土器の編年上の位置を決定づける資料は、まだ十分用意されてはいないが、いくつかの事実によってその推定を試みることは可能である。

大浦山遺跡の第三型式土器を、はっきり三戸式とよぶことに十分な自信はないが、その類例は三戸式土器のなかによりよく見出すことができる。そして、この三戸式類似の土器の下層に大浦山式土器が出土したという事実は、大浦山式が三戸式よりも以前にさかのぼるものであるという考えを、ひそかにいだけせるのである。横須賀市平根山遺跡で発見された土器のうち、「貝殻文のあるもの」は、⁽³⁾田戸下層式ないし三戸式に對比され、また「沈線文のあるもの」は、鋸歯文などを表現する小形の土器であり、三戸式との関連を想定させるものであったが、これらの土器に混つて、あるいはそれより相対的に下層に無文土器・大浦山式土器が出土していることは、その私たちの考えを裏付ける有力な根拠の一つとなっている。

一方、大浦山式土器が井草式・夏島式などより、おくれた所産であることは、ほぼ確実である。平根山遺跡では、井草式・大丸式などより上層に、無文土器・大浦山式土器が出土しており、⁽³⁾また横浜市赤穂原遺跡では、大浦山式土器の包含層の下層から、夏島式相当の土器が発見された。⁽⁷⁾大浦山式土器が、夏島式より新しく、三戸式よりも古いという考えは、今後さらに確証されることはあっても、否定されることはないであろう。

しかし、ここで問題となるのは稲荷台式土器との関係である。稲荷台式土器は、ほぼ関東一円に分布し、かつては最古の年代的位置を与えられ

付 表

南関東諸地域における早期前半の土器型式の編年

	三 浦 半 島	多 摩 丘 陵	武蔵野台地	下 総 台 地	捺 型 文
	(馬ノ背山)				(楕円形文)
	平 根 山 I	羽 黒	井 草 I	西 之 城 I	(格子目形文)
	平 根 山 II	大 丸 I	井 草 II	西 之 城 II	(山形文)
	夏 島	神 明 山	拜 島	+	?
	—	大 丸 III	稲 荷 台	—	
	大 浦 山 I	赤 穂 原 II	—	花 輪 台 I	
	大 浦 山 II	赤 穂 原 III	—	花 輪 台 II	
	平 坂	+	栗 原	—	+
	三 戸	—	—	—	+
	田 戸 下 層	殿 袋	+	城 之 台	+

+ は相当する土器が発見されているもの、—は不明のもの、

() 付の型式は位置未定のものをそれぞれあらわす。

ていたが、いまでは夏島式に後続する型式として理解されている。(8)三浦半島には確実な例は知られていないが、多摩丘陵には、川崎市生田初山、横浜市港北区下田町杉並、同池辺町捨馬ノ台、同池辺町滝ヶ谷、鶴見区上末吉町梶山、同下末吉町不老台、保土ヶ谷区山王通、南区六川町大丸など多くの遺跡で発見されており、大浦山式土器の分布と完全にかさなっている。したがって、二つの型式を空間的な差としてみることは適切でない。先行する夏島式土器の要素をどちらがより多くうけついでいるかといえ、なんらのためらいなしに稲荷台式といえるだろう。夏島式との間には、直接移行したと思える傾向がみられるが、大浦山式との間には大きなずれがある。だから、もししいて、両者の新旧を決めるならば稲荷台式を古く大浦山式を新しいとしなければならない。

4 無文土器群との関係

第一型式(大浦山式)土器と第二型式(無文)土器とは、ほとんど混在の状態で発見されたが、この二つの型式はどのような関係にあるのだろうか。出土の状態からみれば、両者は共存の関係にあったといわねばならない。はたしてそうであろうか。

いわゆる無文土器群は、けっして単純な内容のものではない。私は、すくなくとも二つの型式区分を必要とみとめている。一つ(a式)は、大浦山第二型式土器や平根山遺跡の無文土器の約半数がそれであり、また赤穂原遺跡の無文土器の多くもそれに含まれる。他の一つ(b式)は、平坂式とよんでいるもので、平坂貝塚の無文土器や平根山遺跡の無文土器のある部分がそれに該当し、また断片的には、他の数カ所の遺跡でも発見されている。さらに、それ以外の別の型式も予想されるが、まだ資料的に不十

分であり、ここにとりあげるわけにはゆかない。ところでそのa・b二つの型式は、部分的な器形や土質・色調・整形法などにちがいはあるので、容易に識別することができる。平根山遺跡では、この二つの型式の無文土器が出土したが、「黒土層の上部にはb式が多く(約七割)、下部ではほぼ同数であり、褐色土の上部においてはa式がかなり多かった(約七割)」という事実が知られている。⁽³⁾このことから、私たちは両者のきわめて密接な関係を考慮しながらも、a式をより古い所産と考えた。この考えは、いままかわっていない。したがって、大浦山第Ⅱ型式土器の時期は、平坂貝塚の主体をなす無文土器、すなわち平坂式(b式)よりも相対的に古いと判断しなければならない。

以上のように、大浦式土器にもなった無文土器は、無文土器群のうちでも相対的に古い所産と考えられる。この無文土器は、大浦山式と一対三の割合で出土したが、平根山遺跡の上層では、約九〇〇個の無文土器の破片にもなって、僅かに数片の大浦山式土器が発見されたにすぎなかった。ここでは、無文土器が完全に主体をなしているわけである。しかも、そのうちの半数近くはb式に属する無文土器であり、一方平坂貝塚の無文土器はb式が主体をなしている。これら相互の事実は、おおよそつぎのような図式的な関係を想像させ、型式の移行ないし変化の過程は、いわば傾斜を示しているのだとする考えをいだかせるのである。大浦山遺跡における第一型式(大浦山式)土器と、第二型式(無文)土器との関係

大浦山式

無文土器a式
(大浦山Ⅱ式)

無文土器b式
(平坂式)

三戸式

も、一応そのようなものとして理解されるであろう。しかし、もとよりそれは推論の域をでない。いつか、新しい決定的な事実が、その推論の正否をきめてくれると思う。

なお、大浦山式土器の研究にあたっては、赤星直忠・芹沢長介・吉田格・林国治の諸氏から、かずかずのご指導とご援助をいただいた、ここに、その旨を

記し、感謝の言葉としたい。

(註)

- 1 岡本勇「神奈川県川崎市中谷遺跡」日本考古学年報Ⅰ
- 2 杉原莊介・芹沢長介「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」明治大学文学部研究報告 考古学第二冊
- 3 赤星直忠・村越 潔・岡本 勇「横須賀市平根山遺跡」横須賀市博物館研究報告(人文科学) 第2号
- 4 甲野 勇・吉田 格「花輪台式文化」縄文式文化編年図集一
- 5 戸沢充則「樋沢押型文遺蹟」石器時代第2号、松沢亜生「細久保遺跡の押型文土器」石器時代第4号
- 6 三森定男「讃岐小高島遺跡の研究」考古学論叢第四輯、八幡一郎・加川光夫「早水台」大分県教育委員会

7 未発表、一九五八年六月、芹沢長介氏および明治大学文学部考古学専攻学生等と発掘したさいの所見による。

8 芹沢長介「神奈川県大丸遺跡の研究」駿台史学第七号

あ と が き

いわゆる撚糸文土器群についての研究は、比較的活発に進められてきたが、それは一つには縄文文化の起源を追求しようとする意識と目的に大きくささえられているためであった。

夏島貝塚、大丸遺跡、西之城貝塚などの発掘の諸成果は、どちらかといえば混沌としていたそれまでの研究状況を、いわば安定の方向へみちびく大きな土台となった。撚糸文土器群の編年は、ほぼ確立し、その分布や文化内容がいちぢるしく明確となっていくなかで、最古の縄文式土器の姿は、「南北二系統論」が唱えられたかつての時代のものとは、まったく生れかわったかのようなかたちで、私たちの眼にうつっている。一方こうした情勢に対応して、撚糸文土器群の分布範囲に隣接した諸地域からは、年代的に併行すると考えられる一連の土器文化の存在が発見されるにいたった。縄文文化の起源を追求し、さらにその生成の過程をあきらかにしようとする研究は、あらたな課題に直面している。

このような状況のなかにあって、なお残された多くの問題を解決し、いわば研究上のスタンダードを確立するという役割が、いま私たちに課せられている。ここに大浦山遺跡の調査報告と、大浦山式土器の内容について筆をとったのも、一つにはそのような課題にこたえんがためである。大浦山式土器は、撚糸文土器群から無文土器群への変化ないし発展の問題をとく上で、今後さらにその意味を大きくしていくであろう。

(追記)

横浜市戸塚区汲沢町大丸から、井草式・夏島式などとともに、大浦山式土器(a類)が採集された。これで大浦山式土器分布は八カ所を数えるわけである。